

平成 26 年度

教職員サマーセミナー実施報告書

豊かな発想を地域に、新たな知を世界へ 宇都宮大学

平成 27 年 1 月

宇都宮大学教育学部スクールサポートセンター

栃 木 県 総 合 教 育 セ ン タ ー

はじめに

宇都宮大学教育学部は「教職員サマーセミナー」を平成 15 年度から毎年続けてきました。教員免許状更新講習が始まった影響で 5 年前に講座数を 15 に半減させ、さらに財政状況の厳しさのため、今年度は 10 講座に減らさざるをえなくなりました。ところが、昨年度を上回る 423 人の申し込みをいただきました。定員が 150 人ほど減ったのと、節目研修の方を優先するという事情から、59 名の方が受講できないという事態になり、誠に申し訳なく思っております。来年度の開講に向けて、できる工夫を模索していきたいと考えております。

実際の参加者でも、昨年とちょうど同数の 301 人という結果でした。このうち初任研や節目の研修の一環でない受講者が 104 人もいます。自主的に参加するこの研修機会の重要性は、栃木県内の先生方に周知されているようで、宇都宮大学の地域貢献の一つの柱になっていることを実感します。ありがたいことです。

平成 24 年 6 月の「大学改革実行プラン」や同年 8 月の「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」（中教審答申）などにおいて、国からは、教員養成の質をさらに上げるために大学教員も大きく変わることが求められています。これからは、思考力・判断力・表現力を一段と重視し、異質な他者と協同して問題解決する力を育成する「新たな学び」を指導できる力量を身につけた「学び続ける教師」が必要ですが、私たちはその教師を支援できる大学教員になる必要があります。学校現場や現職教員へのより深い理解と、現場との協働による課題の把握と解決への努力が必要です。大学と教委（総合教育センター）が共催するこのサマーセミナーのような研修機会は、私たち講師をも育てる機会でもあるのです。受講者には毎回アンケートを取らせていただいておりますが、それを一助に、自らも真摯に「学び続ける教師」となる努力を続けてまいります。

予算面では、共催と言うことで、事業費の約半額を栃木県に負担していただいております。厳しい財政状況の中、大学と地域教育界との連携の意義についてご理解をいただきました関係各位に、深く感謝申し上げます。

今後、宇都宮大学の教員、学生、大学院生は、それぞれに力量を高め、地域教育界の期待にさらに応えられるよう努力してまいります。栃木県教育委員会、栃木県総合教育センターをはじめ、皆様のより一層のご指導・ご鞭撻をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 27 年 1 月

宇都宮大学教育学部スクールサポートセンター長

松本 敏

目 次

【 1 】	講座名：外国人児童生徒教育の問題と創造： 事例をもとに日本の学校への適応を考える -----	1
	講 師：丸山 剛史，田巻 松雄，若林 秀樹	
【 2 】	講座名：楽しみながら学べる理科実験 -----	2
	講 師：南 伸昌	
【 3 】	講座名：道徳授業の資料と発問 -----	3
	講 師：上原 秀一	
【 4 】	講座名：発育期における体育・スポーツ指導のあり方 -----	4
	講 師：加藤 謙一	
【 5 】	講座名：作文指導ワークショップ -----	5
	講 師：森田 香緒里	
【 6 】	講座名：校内授業研究を中心とした学校改善 -----	6
	講 師：松本 敏	
【 7 】	講座名：授業に役立つ情報メディアの活用と学習指導 -----	7
	講 師：川島 芳昭，石川 賢	
【 8 】	講座名：放射線について体験的に学ぼう -----	8
	講 師：山田 洋一，堀田 直巳	
【 9 】	講座名：障害の重い子どもとの教育的係わり合い -----	9
	講 師：岡澤 慎一	
【 10 】	講座名：日本人のためのヨーロッパ史入門 -----	10
	講 師：下田 淳	
附 1：	「平成 26 年度教職員サマーセミナー」アンケート -----	11
附 2：	「平成 26 年度教職員サマーセミナー」アンケート集計 -----	13

【 1 】講 座 名：外国人児童生徒教育の問題と創造：事例をもとに日本の学校への適応を考える
講 師：丸山 剛史、田巻 松雄、若林 秀樹
実 施 日：平成26年7月29日（火）
会 場：地域連携教育研究センター2階 B講義室
受講者数：31名

I. 講義の趣旨

本講義では、経済活動のグローバル化と外国人・移民・留学生の流入及び定住に伴い、問題が顕在化している外国人児童生徒教育問題について、①背景と社会問題、②現場での対応と教員の果たす役割、③日本の学校生活への適応、適応を超えた異文化交流の3つの視点から検討し、多文化共生のあり方を考えることを企図した。また、可能な限り、意見交流の場を設け、理解・認識を深めたり、視野を広げたいと考えた。

II. 講義の概要

講義当日は、参加者に自己紹介と問題関心を話していただいた後、以下の3名の教員が分担で講義を行った。

- ① 栃木県の外国人児童生徒教育施策と日本の学校への適応の事例 丸山 剛史（教育学部）
四半世紀になろうとしている栃木県の外国人児童生徒教育／県に先駆けて外国人児童生徒問題に取り組んだ佐野市・日本語教室の事例／日本において大学まで進学することができた事例／留意しておきたいこと

- ② 外国人児童生徒の進路保障実現を目指して 田巻 松雄（国際学部）
外国人管理／外国人教員／高校進学問題／栃木県、神奈川県、茨城県の場合／高校における日本語および学習支援／大学入試における進路保障、ほか

- ③ 教育現場での教員の対応・苦悩について 若林 秀樹（国際学部）
第1話「もう来てもらわなくて大丈夫」／第2話「私は幸せだとは感じなかった」／第3話「いつの間にかいなくなったんです」／第4話「先生、おぼえていますか？」／第5話「本校の子どもですから、私たちでできるだけやってみます」

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者は小学校・11名、中学校・7名、高等学校・7名、特別支援学校4名、計29名であった。

アンケート結果では、わずかに1名のみ「やや不満」

を選択し、座学が多いことを難点としてあげていたが、ほとんどの方が「とても満足」「やや満足」を選択していた。参加者も多く、校種も多様であり、講師、受講者ともに得るところが少ない講習であったと考えている。以下に受講者の感想を掲げ、講座での様子を伝えたい。掲載の都合上、語尾を一部改めた。

・知りたいこと、学びたいことの内容が多かったので、とても興味深く参加できた。できれば、いろんな先生方がいらしていたので、その方々の話をもっと聞きたかった。また受講してみたい。

・現場の先生方に新しい視点から外国人児童生徒の支援についての呼びかけがとても良かった。

・今直面している問題や抱えている悩みについて、多方面からのお話を伺って、それが言語化され、全面的に解決とはいかなくても、明日への希望につながった気がします。情報交換の場も、大変参考になりました。

・普段の研修会ではあまり扱われない内容であり、今までは在学中のことばかり考えていたが、卒業後のことにも目が向くようになった。

・外国人児童生徒理解について深く考えることができた。また今回の話から外国人生徒以外、通常の日本人の生徒に対しても担任としてのあり方を考えさせられました。

・実際に困っていることに対して事例や統計等をもとに解決につながる糸口を講演の中で各講師の先生方が示してくださった。

・現場にそくした話がたくさん聞くことができた。各校の実践を知ることができた。

・具体例や数値で納得がいった。資料も豊富だった。

・小・中・特支の現状が知れて大変勉強になった。

・専門的な分野における、“入門”という形で参加できる。問題意識をもつことができ、今後に生かすことができるような内容であった。

【 2 】講 座 名：楽しみながら学べる理科実験

講 師：南 伸昌

実 施 日：平成26年7月29日（火）

会 場：8号館C棟3階 理科教育学学生実験室

受講者数：8名

I. 講義の趣旨

中学校の理科で扱う教材・道具を、安全面に配慮しながら効果的に活用できること、中学校の先生自身が実験を楽しめることをねらいとした。

II. 講義内容

A. [物理分野] 屈折とものの見え方

- ・透明人間が見える理由
- ・濃度、温度による屈折率の変化
- ・蜃気楼の作成
- ・消える十円玉のしくみ

「見える」というありふれた現象の興味を深めるため、無色透明な物体の「見え方」や、光が進路を変えることにより見える／見えなくなる光学現象を取り上げた。自分の目での見え方を客観視することにより、「見える」ことへの認識を深めた。

B. [物理分野] 像が見えるとは

- ・像とは何か
- ・ピンホールカメラ／虫眼鏡カメラの作成
- ・物体が浮き上がって見える仕組み

「像」は物体の色の配置を1対1で移したものであるという視点を与え、ピンホールカメラなどの意義を理解した上で、工作を行った。半球面鏡で像が浮かび上がる原理を、見え方の客観視の観点で説明した。

C. [生物分野] 顕微鏡で観察しよう

- ・顕微鏡の使い方
- ・葉の気孔の観察（直接法／レプリカ法）
- ・オオミジンコの観察

ツクサの葉の裏面の表皮を試料としてピント合わせの練習を行った後、各自採取した葉の観察を行った。簡易記録方法としてデジカメでズームを調整して撮影する方法を紹介した。ツクサと異なり、はぎ取りが難しい葉は、水絆創膏で表面の型を取る「レプリカ法」で試料

を作成し、観察・記録した。

生物試料として、オオミジンコを紹介した。シャーレに取り分けたオオミジンコをホールスライドガラスに取り、観察、撮影を行った。

D. [化学分野] 酸とアルカリ

- ・酸性、アルカリ性とは
- ・着色水溶液一般の指示薬としての性質
- ・紫芋粉末で酸性・アルカリ性の強さを調べる実験

酸・アルカリは水溶液中の物質の安定性を決める性質であるという観点を与え、物質の溶解などの理解を深めた。

お茶やジュースを用いて、酸性・アルカリ性で色が変わるのは、着色溶液一般の性質であることを示し、効果的な指示薬である、紫芋粉末を用いた実験を行った。また、重曹水溶液を酸性にして二酸化炭素を追い出し、安定性の変化が「混ざるな危険」の原理であることを説明した。

D. [化学分野] ボルタ電池、備長炭電池

- ・ボルタ電池の仕組み
- ・備長炭電池の活用

ボルタ電池を作成し、実験を通じて電極反応と電気の流れを詳しく解説した。

備長炭電池を作成して大きな電力を得るコツを説明し、電子オルゴールやLED、豆電球などで動作確認した。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

本来、「中学校理科分野」であったが、中体連の大会と日が重なり、参加者は中理3名、高理1名、中英1名、小（理科以外）3名であった。当日、急遽内容を差し替え、力学や電気泳動は外し、工作や、小中に共通の実験や内容を重点的に扱うこととした。それぞれの受講者は熱心に取り組み、それなりに満足して戴いたようであったが、講座のねらいを達成できたとは言い難い。講座の日程決定を、小中学校の行事予定が決まってからにして戴けるよう、希望する。

【 3 】講 座 名：道徳授業の資料と発問

講 師：上原 秀一

実 施 日：平成26年7月30日（水）

会 場：UUプラザ2階 コミュニティフロア

受講者数：38名

I. 講義の趣旨

小・中学校の道徳の授業は、道徳的实践力を育成するために行われている。道徳的实践力を育成するとはどういうことだろうか。道徳的实践力を育成するために、授業ではどのような資料を使ってどのように発問すべきだろうか。児童生徒の反応にどう応じるべきだろうか。具体的な材料を使ってこれらの問題を考えた。講義は、グループワークを中心に行った。

II. 講義内容

1. 資料「公園の草とり」を用いたグループワーク

まず、小学校3年生用の読み物資料「公園の草とり」を読んで発問を考えるグループワークを行った。この資料は、文芸堂『3年生のどうとく』に掲載されている。教師用指導書では、この資料を用いた授業のねらいは、「働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くとする心情を育てる。」との形で提案されている。

資料は、語り手の「翔太」が母親に言われて公園の草取りをするという一人称文体の物語である。翔太が草取りをする様子を見て、母親は、「だれかのためにがんばるとか、こうしたらみんながよろこんでくれるとかって、よいと思うでしょ。お母さん、すきだなあ。」と言う。

この資料をよく読むと、翔太は、「朝、六時前に家を出て」、「午後七時、あたりが暗くなってから、やっと草取りを終えて家に帰った。」と書いてある。小学生が炎天下に約13時間の奉仕活動を行う、という異常事態である。しかし、通常の授業では、この点が議論されることはない。教師も子どももこのことに気がつかない。受講者に発問を考えさせたところ、この事実を読み取ったのは数名のみであった。「公園の草とり」が教えてくれるのは、教師は読み物資料を注意深く、疑って読まなければならない、ということである。受講者に、この心構えを共有してもらった。

2. 学習指導要領解説における「発問の工夫」の扱い

次に、小中学校の学習指導要領解説道徳編から「発

問の工夫」に関する部分を抜粋して検討した。「考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問など」が重要であることを確認した。

3. 資料「森のしきしゃ」を用いたグループワーク

次に、小学校3年生用の読み物資料「森のしきしゃ」（日本標準『みんなで考えるどうとく 3年』）を読んで発問を考えるグループワークを行った。教師用指導書は、この資料を「明朗・誠実、反省」に関する授業に用いるよう提案している。しかし、この資料は、差別や偏見の事実を虚構形式で描いたものである。「明朗・誠実、反省」という狭い徳目では説明できない事実が描かれている。受講者には、教師用指導書で提案された「授業のねらい」を超えて、広く発問を構想するよう促した。

4. 資料「ラッシュアワーの惨劇」を用いたグループワーク

最後に、小学校6年生用の読み物資料「ラッシュアワーの惨劇」（学研『みんなのどうとく 6年』）を読んで発問を考えるグループワークを行った。生命尊重を考えさせるための資料とされているものを取り上げた。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者の内訳は、小学校27人、中学校11人だった。初任者研修が16人、2～5年目研修が8人、10年目研修が11人であった。経験年数に応じてグループ分けを行った。

アンケートを見たところ、受講者にはおおむね満足してもらえたようだ。グループワークの時間を十分にとったことが高く評価されていることが分かった。受講者自身の日頃の経験をお互いに共有しながら道徳授業の改善に向けた省察を主体的に行う機会が求められているのではないかと思った。

道徳の教科化が検討される中、道徳授業の改善に向けた講座のニーズがあることが分かった。受講の申し込みに応じられなかったケースが少なからずあったので、次年度も担当する機会があれば定員の増加を検討したい。

【 4 】 講 座 名 : 発育期における体育・スポーツ指導のあり方

講 師 : 加藤 謙一

実 施 日 : 平成26年8月1日 (金)

会 場 : 地域連携教育研究センター2階A講義室 及び 第1体育館

受講者数 : 31名

I. 講義の趣旨

近年の子どもの体力低下や教育に関わる問題点をあげながら、就学前から小学校の子どもの体育やスポーツ指導の意義について理解する。そして、実技を通して児童期における体育や運動指導の方法について具体的に学ぶことをねらいとする。

II. 講習内容

講習は、講義、教具作成および実技で構成した。講習に先だって受講生の自己紹介(名前, 所属および受講理由などを簡単に)を行った。

【講義】

1. 現在の子どもの運動能力について
 - ・体育の日の新聞記事からみた現状について
 - ・現代の子どもの遊びについて
2. 運動発達の概要
 - 1) スキャモンの発育曲線からみた運動発達の特徴
 - ①身長発育
 - ②骨格発育
 - ③体重発育
 - ④筋と筋力の発達
 - ⑤エネルギー代謝と最大酸素摂取量の発達
 - ⑥神経・筋コントロール能力の発達
 - 2) 児童前期(6~8歳)の運動発達
 - ・運動のやり方の洗練化と多様化
 - 3) 児童後期(9~12歳)の運動発達
 - ①身体調和的発達
 - ②運動意識的な制御
 - ③即座の習得
 - 4) 思春期前期の運動発達
 - ①PHVA
 - ②思春期不器用
 - 5) 思春期後期の運動発達
 - 6) 発育発達に応じたトレーニングの考え方
 - 7) 運動とパーソナリティの関係
 - 8) 小学生のスポーツ活動のあり方について
3. 運動観察の意義と観察学習の必要性
 - ・VTRの観察による運動の見方
 - ①前転と走運動の動画を取り上げて上手な子とそうでない子の比較
 - ②運動観察のポイント
 - ③運動観察力の重要性
 - ④運動観察を活かした指導と評価
 - ⑤観察学習の意図するもの

【教具作成】

4. 簡単な運動用具の作成(手作りフライングディスク)
厚紙、古新聞、布カラーテープを使って手作りのフライングディスクを作成した。

【実技(簡便に実施できるものを紹介した)】

5. 「多様な動きをつくる運動(遊び)」に関わる運動教材
午前中で作成したフライングディスクを使った運動(準備運動、体づくり運動、各運動領域に関わる事例)を紹介しあった。
6. 運動を教材化する方法(走、跳、投運動の指導)
 - ①スタートダッシュの指導ポイント:スタンディングスタートの指導の仕方
→(キック足の見つけ方、地面を蹴るための適切な膝の角度の見つけ方など)
子どもに一人一人に見合った方法について
→腕振り、スキップ、ギャロップなど
 - ②全力疾走の指導ポイント:制限走を用いたアドバイスの仕方
 - ③投動作の発達過程にもとづいた指導ポイント
 - ・長座姿勢
 - ・立ち膝姿勢
 - ・バウンド投げ
 - ・サイドステップ投げ
 - ・真上投げ
 - ④指導内容と評価の観点について
実技指導のなかで体育における評価の考え方について解説を行った。
7. 総括および受講者の質問への回答など

III 講座の自己評価と受講生の様子

受講生31名は全て午前午後の講習に積極的に取り組んでいた。そのうち13名が初任者研修、3名が2-5年目研修、11名が10年目研修、1名が学校栄養士、3名が区分外の教員であった。彼らの様子からは講習内容を実際の授業に役立てたいという意気込みが感じられた。またいずれの教諭も、自校の体育学習のヒントを得ることを期待しているようであった。

講習では質問や疑問事項を積極的に出してもらった。そのことから本講座内容への興味・関心が強いことが感じられた。また、午後の実技では館内の温度35度、湿度80%を超えた蒸し暑い状況であったにもかかわらず、参加者全員が積極的に実技に取り組んだ。

【 5 】講 座 名 : 作文指導ワークショップ

講 師 : 森田 香緒里

実 施 日 : 平成26年8月7日 (木)

会 場 : 地域連携教育研究センター2階 A講義室

受講者数 : 31名

1. 講義の趣旨

作文を苦手とする児童生徒は多く、また作文指導に不安を抱く教員も多い。作文指導に関する悩みや疑問を受講生間でまず共有し、作文指導の基本的課題について議論する。

その上で、表現技術を明確化した指導法や海外の作文指導法を紹介し、実際に作文課題に取り組む。自らの作文を受講生間で相互批評する活動を通して、各自が今後に必要な作文指導について考える機会を持つ。

2. 講義内容

(1) 日々の作文指導から

自己紹介を兼ねて、「作文指導における児童生徒の実態」や「これまでに工夫した指導や苦労」について一人ひとりに語っていただいた。本セミナーは、小中高および特別支援学校など多様な校種の教諭が受講しており、実に多くのご意見が挙った。一方で、以下のような共通性も見いだすことができた。

- ・作文の評価について（どこまで添削をすべきか等）
- ・主述のねじれや話し言葉調の表現が見られる
- ・型（構成）を与えることの功罪
- ・児童生徒の学力差への対応

受講生は、作文指導の悩みが他の受講生にも共通していることを知り、安堵している様子だった。同時に、これらの共通性にこそ、優先して解決すべき問題が含まれているという問題意識を持つことができた。

(2) 作文指導における現代的課題と解決策

(1) でまとめた内容と関連させながら、作文指導における現代的課題について再度確認した。本セミナーでは、以下の4点を挙げ、それぞれに解決策を提案した。

- ①一斉指導が難しい。→欧米の作文指導を援用する。
- ②指導に時間がかかる。→指導すべき作文技術を絞り、短時間指導・多作を優先する。
- ③どのような作文技術をどのような順で指導するかが

不明確。

→発想力、要約力、描写力、論証力をまず優先させる。

- ④評価が大変。→評価の観点をできるだけ少なくし、児童生徒の自己評価と相互評価に重点を置く。

(3) 具体的な作文課題の体験と相互評価

上記①～④に関して、筆者がこれまでに研究・実践を行っている作文課題（以下）を提示し、受講生に実際に挑戦していただいた。

○絵を見て会話を書く（イギリスの発想指導）

○5行詩に挑戦（ドイツの発想指導）

○再話に挑戦（ヨーロッパの要約指導）

○論証の基本（トゥールミン・モデル）

○ロゴマークの選択（比較と批評）

記述後は、グループ毎に相互評価を行っていただいた。評価の際には、できるだけ良い記述を見つけ褒めるよう指示した。作文の添削指導の基本は欠点探しではなく、表現法を習得するための支援であることをわかっていたためである。

上記の作文課題は、欧米の作文指導法を筆者がアレンジしたものである。ゲーム的な要素を取り入れ短時間で書けるよう工夫してあるため、受講生も楽しみながら参加していた。

最後に、本セミナーを振り返って、各自の学校や児童生徒の実態に応じた作文指導を構想する時間を設けた。

3. 講座の自己評価と受講者の様子

ワークショップ形式を予定していたが、受講生が増えたことにより講義形式が増えてしまい、受講生間の課題解決の機会が減ったことが反省点である。しかし、作文課題に実際に取り組み相互評価する機会を設けたことで、各自が有効性を実感し、学校の実態に応じて援用する方法を考えることができていたように思う。受講生の評価も概ね良かったことから、今後もこうした活動を取り入れたセミナーを構想していきたいと考えている。

【 6 】講 座 名：校内授業研究を中心とした学校改善

講 師：松本 敏

実 施 日：平成26年8月8日（金）

会 場：8号館C棟2階 大会議室

受講者数：44名

I. 講義の趣旨

これからの学校に必要な協働体制とそれを支える同僚性の重要性と校内授業研究の有効性について理解すること。

具体的な授業を見てグループで検討する作業を体験し、自校で実施するためのきっかけにすること。

II. 講義内容

A. 講義「校内授業研究を中心とした学校改善」

何年も続けて受講される方もいる中で初めての受講者もいるので、基本的な話を全体講義として行った。

1. 高校における授業研究・学校改善の動き

今年は、参加者の中に高校の先生が例年以上にいること、全国的に見ても小中学校での授業研究の動きが高校に及んでいることを踏まえて、最初に、高校の現状と取り組み始めた高校の例を取り上げて講義した。

広島県立安西高校、茨城県立茎崎高校などの例から、小中学校と同様に、学校組織・教員の協働の在り方を変え、学校力を高める効果が出ていることを説明した。

2. 「同僚性」という考え方

(1) 同僚性 collegiality とは

(2) 同僚性の7つの構成概念

3. 校内研修（授業研究）の継続による成果

4. ビデオの効用と撮影のしかた

5. ビデオによる授業リフレクションの進め方

B. 校種別小グループによるディスカッション

高校 2グループ、特別支援学校 1グループ、中学校 2グループ、小学校 4グループ に分かれて、校内授業研究の現状と課題についてディスカッションを行った。各グループには、授業研究について経験豊富な方が入るようにした。

小中学校では「授業研究が生徒指導など他分野にも波及して学校改善に役立っている実感がある」「行っているが授業力向上の実感に結びつきにくい」「学力向上

への要求との間でジレンマがある」など、高校では「授業公開期間など授業を見合える機会は増えている」「教員の専門性意識や年齢などの壁をどのように乗り越えるかが課題」など、特別支援学校では多様な学年・内容で一丸となって実施するのが難しい」というような意見が出た。

C. 授業ビデオの視聴と授業研究会の実践

1. 視聴したビデオ

小学校6年算数 分数の割り算

付箋紙にメモを取りながら視聴

2. グループによる話し合い

(1) 学校種が混合するように、4～5人のグループを9個編成した。

(2) 模造紙に時系列で付箋紙を貼りながら、観察したこと、思ったこと、意見を述べていく。

(3) 一通り意見を出したら、話題の中心を幾つか拾い出し、意見交換をする。

(4) その結果を模造紙の上に構造化された図として示していく。

3. 代表グループによる発表

すべてのグループが発表する時間は無かったので、3つ選んで、そのグループの代表に発表していただいた。主体的にグループ学習に取り組む児童のようす、集中の続かないように見える児童が途中で何度も関わり出す様子など、学び合いの授業の在り方と効果について考察するグループが多かった。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講者には高校の教員も多くいて、授業研究会の現状に大きな差があるが、小学校の授業を対象にしても受講者の意欲と積極性により、小・中学校の教員と活発に話し合い、むしろ独自の視点を提供してくれる効果もあった。受講者の評価は今年も良好であった。今後も、初心者にもリピーターにも満足していただける構成を考えたい。

【 7 】 講 座 名 : 授業に役立つ情報メディアの活用と学習指導
講 師 : 川島 芳昭、石川 賢
実 施 日 : 平成26年8月11日 (月)
会 場 : 教育学部附属教育実践総合センター計算室 2階
受講者数 : 28名

I. 講義の趣旨

学校の最近の情報化の状況について情報を交換する。教育の情報化や、コンピュータやネットワークなどの情報メディアを活用した教科の学習指導支援について、最近の教材コンテンツの利用を交えて講義・演習する。また、学習指導用コンテンツの開発について演習する。

II. 講義の内容

授業の内容と進行は、概ね以下のようであった。

A 午前の講義

- (1) この講座で利用する E-ラーニングシステムの機能、利用方法、操作演習
- (2) 社会のデジタル化の進展と教育
- (3) 教育における ICT 活用の柱
- (4) 学校の情報化の状況、学校と家庭・地域との連携
- (5) 教育の情報化の枠組み
- (6) 情報メディア (電子黒板を含む) による教科の学習指導の支援
- (7) 学習指導用コンテンツの紹介と利用演習
教育情報ナショナルセンターのサイト検索・試用
教育用画像素材集の試用など
- (8) ICT 利用による学習指導への効果(日本と英国, 小学生, 中学生, 高校生)

B 午後の講義

- (1) 情報モラルの育成について
学校における情報モラル教育の意義
文部科学省が提示する情報モラル教育
情報活用能力と情報モラル
ネット犯罪の実態 (学校裏サイト, 出会い系など)
学校における著作権、肖像権の考え方
情報モラルの Web サイトの例
- (2) PowerPoint を利用した教材作成練習
- (3) PowerPoint を利用した教材の作成
- (4) iPad、電子黒板の授業での活用

III. 受講者の反応

受講者は小学校 18 名、中学校 5 名、高校 4 名、特別支援学校 1 名の計 28 名であった。

今回の「情報メディアの活用と学習指導」の受講者は、コンピュータに関する基本スキルについては研修したものの授業での利用に自信が持てないという教員から、工業高等学校の情報担当教員まで、広範な段階の受講者であった。

授業内容に関しては、情報化の現状や教科の学習指導での ICT の活用に関する取り組みなどへの関心が高く、全員が意欲的な態度で受講していた。また、学習指導用コンテンツに関しては、インターネット上に流通しているコンテンツの例や指導事例を実際に検索して試用することが、受講者自身のこれからの教育活動にとって大変参考になっているようであった。

午後は、学校における情報モラル教育の意義と文部科学省が提唱する情報モラル教育の考え方を知らせた後、指導に必要な具体的な考え方を、演習をとおして指導した。さらに、ネット犯罪やコミュニティーサイトの実態をビデオや実際のサイトを基に指導し、児童・生徒への対応、学校での指導のあり方等の検討を行った。このことは、どの学校種の教員にとっても身近な問題であり、関心も高いため、意欲的に受講していた。

次に、教員に求められる能力の 1 つである、デジタルコンテンツを活用した学習指導システムの構築方法を検討した。その後、教育用コンテンツの作成演習を行い、基本的な作成手順から、受講者なりの応用を加えた教材作成に取り組んでいた。また同時に、普段利用している PowerPoint を利用することにより、教材ができることへの感動もあったようである。最後に、iPad 等のタブレット端末や電子黒板の利用体験を行った。

セミナー後の意識では、多くの教員が授業の中でどのように活用したら良いかが分かり、意義があったと感じているようであった。

【 8 】講 座 名：放射線について体験的に学ぼう

講 師：山田 洋一、堀田 直巳

実 施 日：平成26年8月21日（木）

会 場：8号館A棟2階2201教室 及び D棟1階2101教室（体験2のみ）

受講者数：28名

I. 講座の趣旨

近年、学校でも放射線について扱う機会がみられるようになった。放射線と放射性物質について、何を、どのように、どこまで教えるか、むずかしい問題である。

ここでは、放射線と放射性物質について、参考資料を各種提供し、初歩的な理論と歴史を学び、あわせて種々の教材を体験する機会を提供することを目的とした。

II. 講座の内容

そもそも放射線とは何か、原子のつくりと放射線の関係、放射線測定器（サーベイメーター）の原理説明と測定上の留意点、教材を用いた放射線測定実習、放射線を見る（霧箱）実験、放射線と私たちの暮らし等の解説を行った。

講義や資料の説明は必要最低限とし、体験を主とした。

A. 講義

放射線と放射性物質について基礎的な知識を得ようという希望者も多かったので、まず初歩的な理論と歴史的な話を講義し、合わせて放射線測定の際、留意すべき点などを具体的に紹介した。

（1）放射線と放射性物質研究の歴史と理論

（2）サーベイメーターの特性と原理説明

B. 体験1（放射線の性質実験用教材の取り扱い実習）

小グループに分かれて、まず測定機器（GM管式サーベイメーター、及びNaIシンチレーション式サーベイメーター）の取り扱いになれて頂いた。次に、室内の放射線レベル（blank値）を測定し、メーターの指針がかなり揺らぐことを体験した。

天然放射線を出す身の回りの物質を集め、実際に β （ベータ）線と γ （ガンマ）線を観測し、それらを遮へいする実験などを行い、結果をワークシートにまとめた。

（1）サーベイメーターの取り扱い方

（2）環境放射線の観測（blank値）とそのゆらぎ

（3）放射線を出す身の回りの物質調べ

（4）放射性物質からの距離と放射線の減衰の関係

（5）遮へい物質の種類と放射線の遮へいの関係



C. 体験2（霧箱作成と放射線軌跡の観察実習）

ウィルソンの霧箱の歴史的意義や原理を説明した後、身近な材料の簡単な加工で作成できる実例を体験して頂いた。 α （アルファ）線と β （ベータ）線の軌跡の出方の違いを説明し、実際に軌跡を観察した。

（1）霧箱の作成体験

（2） α 線、及び β 線の軌跡観察実習

D. 実習のまとめと事後アンケート、意見交換

各グループから体験1と2の結果を報告して頂き、結果について全体で確認した。その結果、放射線測定上の誤りや測定結果の解釈の仕方について、全体で知識を共有することができた。

授業で使えそうな放射線教材の入手方法など、実践的な内容の意見交換を行った。

【 9 】講 座 名：障害の重い子どもとの教育的係わり合い

講 師：岡澤 慎一

実 施 日：平成26年8月22日（金）

会 場：8号館D棟1階 2101教室

受講者数：44名

I. 講義の趣旨

本講座では、重い障害がある子どもとの教育的係わり合いにおいて重要になる視点について、長期間にわたる教育実践の経過に関する映像資料をふんだんに用いながら検討を進めた。特に、子どもの行動の意味、コミュニケーションにおける意味の共有、子どものイニシアチブ、などに焦点をおいた。こうした取り組みのなか、障害の重い子どもへの教育は、教育の原点であるといわれる意味を見出してもらうことを目的とした。

II. 講義内容

当日の進行は以下のものであった。

午前（9時30分～12時）

- ・オリエンテーション
- ・行動の意味について
- ・教育実践事例紹介①：行動が著しく乱れがちなYくんと
の活動の拡大経過
- ・コミュニケーションにおける意味の共有について

（昼休み）

午後（13時～16時00分）

- ・教育実践事例紹介②：超重症児との共同的活動において
見出された身体の動きの意味について
- ・教育実践事例紹介②に関するグループでの意見交換
- ・障害の重い子どもの授業づくりの視点—子どもにとって
の学びの意味を問う—／教育実践事例紹介③
- ・まとめ、アンケート

以下、内容ごとに順を追って簡単に説明する。

本講座は、同一テーマでここ数年来継続しているものであるが、今年度は、サブテーマとして、「意味」という概念をキーワードとして中心に据え講義内容の構成を考えてみた。

まず、行動の意味について検討を加えた。「特定行動の

発現（展開、終止）が、そのときどきの、生体系内、生体系外の特定状態より発信する諸信号の処理、配合の特性を条件として調整される関係にあることを“行動体制”とよぶ」

（梅津、1976）と考えれば、人はすべて生きている限り、自身の内外の環境との秩序ある相互交渉を展開しているといえる。子どもとの教育的係わり合いは、係わり手である教師がその秩序をいかに見出していくかということから始められるものであることを確認した。このことを踏まえ、行動が著しく乱れがちであったYくんと教育実践研究の経過を紹介した。また、こうした実践を支える観点として、子どもイニシアチブ・アプローチ（土谷、2012）、JOYFUL SHARED EVENT（土谷、2004）および「共創コミュニケーション」（岡澤、2012；土谷、2011）についても言及した。

午後は、超重症児との共同的活動において見出された身体の動きの意味の共有に関する実践経過を紹介するとともに、受講生同士による意見交換の時間を設けた。最後に、身体の動きが極めて微弱微細な超重症児が表出した行動の意味の理解に関する実践経過を紹介し、行動の意味を理解するために大切な観点のいくつかについて受講生との間で共有した。

III. 講座の自己評価と受講者のようす

受講生の多くは大変熱心に聴講し、また積極的に意見交換に参加されていた。アンケートの結果を見れば、概ね好評であったといえるが、内容や進行についての課題や意見もあげられ、次年度以降、改善していきたいと思う。本講座で使用する映像資料のほとんどが講師自身の教育実践によるものであり、そのことが講話の内容にも一定程度の説得力を与えているように思われる。今後も自分自身の教育実践研究を推し進め、実践的見識を蓄積し、現場の先生方と対等なパートナーとして語り合えるような研究者を目指していきたいと改めて考えている。

【10】講座名：日本人のためのヨーロッパ史入門
講師：下田 淳
実施日：平成26年8月22日（金）
会場：8号館A棟3階 2301教室
受講者数：18名

I. 講座の趣旨

学校教育に必要な世界史、とくにヨーロッパ史の本質を理解し、それによって授業に反映させること。

II. 講義内容

講義の要旨はプリントで配布し、講義を中心におこなった。

- ・ヨーロッパの範囲と時代区分
- ・カール大帝のヨーロッパ
- ・封建社会とは何か
- ・17世紀にサイエンスが生まれた訳
- ・資本主義とは何か
- ・資本主義がヨーロッパで生まれた理由
- ・ソ連とは何だったのか
- ・キリスト教の果たした役割
- ・現代世界を動かすナショナリズムがヨーロッパで成立した理由
- ・ナチズムについての理解
- ・アメリカ合衆国についての理解
- ・EUについての理解
- ・総括：ヨーロッパ、世界そして日本の未来

III. 講座の自己評価と受講者のようす

よく聴いてくれた。質問も出て活発な講義となった。専門に偏らず欧米の歴史現象を、私独自の理論から語ったので、熱心に聴いていただいたと思う。当たり前であるが、歴史学に興味のある先生が多かった。

「平成 26 年度 教職員サマーセミナー」についてのアンケート

宇 都 宮 大 学
スクールサポートセンター(SSC)

この度は、教職員サマーセミナーにご参加をいただき誠にありがとうございました。今後の本セミナーの改善に資するため、参加された方々から率直なご意見をいただきたく、お疲れのところ誠に恐縮ですが、以下のアンケートにご協力くださるようよろしくお願いいたします。

1 あなたご自身について教えてください。(【1】と【4】は○でかこむ)

- 【1】 年齢 20歳代 30歳代 40歳代 50歳代 その他
- 【2】 性別 ()
- 【3】 教職経験年数 _____ 年
- 【4】 現在の勤務学校種 小学校 中学校 高等学校 特別支援学校 その他

2 サマーセミナーの開催をどのようにして知りましたかお尋ねします。

- 【1】() 勤務している学校等に来ている文書（ポスター・パンフレット）で知った
 【2】() 総合教育センターでの研修のときに知った
 【3】() 総合教育センターあるいは宇都宮大学のホームページで知った
 【4】() その他（具体的に

3 サマーセミナーの開催時期と期間についてお尋ねします。

- 【1】最も受講しやすい時期はいつ頃ですか。(複数回答可　○でかこむ)

7月	20~25日	26~31日	
8月	1~8日	9~15日	16~22日
	23~31日		

- 【2】一つの講座の開催期間はどれくらいが良いですか。(○でかこむ)

半日 1日 1日半 2日 3日 それ以上

- 【3】開催場所についてはどこが良いですか。

- ①（ ）宇都宮大学がよい
- ②（ ）宇都宮大学以外で開催（具体的に）

4 今回受講された講座の内容についてお尋ねします。

- 【1】受講された結果は次のいずれですか。

- ① () とても満足
② () やや満足
③ () やや不満
④ () とても不満

【裏面に進んでください。】

【2】上記【1】で「①とても満足」または「②やや満足」と答えられた場合、具体的にどのような点でそう思われたのですか。

【3】上記【1】で「③やや不満」または「④とても不満」と答えられた場合、具体的にどのような点でそう思われたのですか。

5 サマーセミナーの広報の方法についてお尋ねします。

どのような方法で広報すればよいと思われますか。

① 今の方法（ポスター・パンフレット・HP 等）で十分である。

② その他

具体的に

6 宇都宮大学が提供する研修に期待することについてお尋ねします。

どのような内容の研修を望めますか。どんなことでも結構ですのでお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。

申込者数	423人
受講者数	301人
アンケート回答数	295人
アンケート回収率	98.0%

1. 設問1：(1) 年齢

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① 20代	119	40.3%	26
② 30代	108	36.6%	31.3
③ 40代	39	13.2%	26.7
④ 50代	28	9.5%	14.7
⑤ その他	1	0.3%	1.3
⑥ 回答無し	0	0.0%	0
	295		

3. 設問1：(3) 教職経験年数

平均年数	8.4 年
(回答有り)	293 人
(回答無し)	2 人
	295

2. 設問1：(2) 性別

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① 女	175	59.3%	54.3
② 男	116	39.3%	44.3
③ 回答無し	4	1.4%	1.3
	295		

4. 設問1：(4) 現在の勤務学校種

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① 小学校	141	47.8%	39.7
② 中学校	56	19.0%	19.0
③ 高等学校(私立高含)	49	16.6%	20.7
④ 特別支援学校	49	16.6%	20.0
⑤ その他	0	0.0%	0.7
⑥ 回答無し	0	0.0%	0.0
	295		

5. 設問2：(1) 講座開講に関する情報の入手方法（複数回答あり）

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① 勤務している学校等に来ている文書（ポスター・パンフ）で知った	165	52.2%	57.1
② 総合教育センターからの案内で知った	118	37.3%	28.4
③ 総合教育センターあるいは宇都宮大学のホームページで知った	22	7.0%	8.1
④ その他（具体的に）	11	3.5%	6.5
⑤ 回答無し	0	0.0%	0.0
	316		

6. 設問3：(1) 講座の開催時期（受講しやすい時期は？）（複数回答あり）

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① 7月 20～25	30	5.9%	2.4
② 27～31	117	23.1%	18.5
③ 8月 1～ 8	178	35.2%	32.7
④ 9～15	61	12.1%	14.6
⑤ 16～22	79	15.6%	23.2
⑥ 23～31	41	8.1%	8.1
⑦ 回答無し	0	0.0%	0.4
	506		

7. 設問3：(2) 講座の開催期間（複数回答あり）

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① 半日	61	19.6%	16.6
② 1日	244	78.2%	77.7
③ 1.5日	1	0.3%	0.6
④ 2日	3	1.0%	3.5
⑤ 3日	1	0.3%	0.6
⑥ それ以上	0	0.0%	0.3
⑦ 回答無し	2	0.6%	0.6
	312		

9. 設問4：(1) 講座の内容（複数回答あり）

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① とても満足	213	72.2%	78.3
② やや満足	74	25.1%	21.3
③ やや不満	7	2.4%	0.3
④ とても不満	1	0.3%	0.0
⑤ 回答無し	0	0.0%	0.0
	295		

8. 設問3：(3) 講座の開催場所（複数回答あり）

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① 宇都宮大学がよい	273	90.7%	95.4
② 宇都宮大学以外	25	8.3%	4.3
③ 回答無し	3	1.0%	0.3
	301		

10. 設問5：サマセミの広報

区 分	人 数	割 合(%)	備 考
① 今の方法で十分	285	96.6%	95.0
② その他（具体的に）	4	1.4%	3.3
③ 回答無し	6	2.0%	1.7
	295		

11. 記述欄

設問3 (3) サマーセミナーを宇都宮大学以外の場所で開催する場合の開催希望場所
設問4 (2) 「とても満足」、「やや満足」と答えた具体的な理由
設問4 (3) 「やや不満」、「とても不満」と答えた具体的な理由
設問5 広報について、ポスター、パンフの配付及びHPへのアップの他にどのような方法が良いか
設問6 宇都宮大学が各教職員に提供する研修としてどのような内容の研修を望むか

※備考欄の数値は平成25年度の割合(%)である。

平成 26 年度 教職員サマーセミナー実施報告書

平成 27 年 1 月 印刷発行

宇都宮大学教育学部スクールサポートセンター

編集・発行 〒321-8505 宇都宮市峰町 350

T E L : 028-649-5272

F A X : 028-649-5334

E-mail : ssc-1@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

印 刷